

オルテガ・イ・ガセー
『アンダルシーア論』

(原) 岡住正秀
永川 怜二

オルテガ・イ・ガセー「アンダルシニア論」

訳者 岡住 正秀・永川 恰二

序

一九世紀の初めから終わりまでアンダルシニアはスペイン全土に支配的な影響力を及ぼしてきた。過ぎ去った世紀はカティスの国民議会（一八〇八年）に始まり、カノバス・アル・カステイリヨの暗殺（一八九七年）とシルベータを称えて幕を閉じる。¹¹この二人はどちらもマラガ出身者である。当時流行した思潮には、いわばアンダルシニア説りがあった。画家たちはしきりにアンダルシニアの絵—テラスひとつ、植木鉢数個、そして真つ青な空を描いた。誰もが南部出身の詩人や作家を愛読した。いつも話題にのぼるのは「聖母マリアの地」であった。シエラ・モレーナの山脈も密輸業者も、まるで国民的英雄あつかい。スペインという国全体の存在理由はただひとつ、その領土の中に光栄にもたまたま地球上の一地方アンダルシニアを含んでいることだと感じていたらしい。

しかし世紀の変わり目になると、こんな事情も他の多くのことと共に変化する。北方の諸地方が立ち上がり、カケルニーヤ人、バスク人、アストゥリア人の優位がはじまった。南部の文学芸術が沈黙する。アンダルシニア出身者の政治力も衰えた。南国風のとんがり帽子やつば広帽に代わって北国のベレー帽が流

行する。いたるところにバスク風の小住宅が建てられた。スペイン人はバルセローナ、ビルバオ、サン・セバスティアンなど近代的都市を自慢する。話題になるのはもっぱらビスカーヤの製鉄業か、ランブラス大通りか、アストゥリアスの炭坑のことである。

スペインの上半分と下半分の間で重心が行ったり来たりするこの振り子運動は奇妙な現象である。歴史を過去にさかのぼって往復のリズムの周期を測り、果たしてそれが我々のスペイン史全体を北の時代とか南の時代とかに区分しうるほど安定したものか否かを調べれば、さぞかし興味をそそる研究になるだろう。確實に言えるのは、感覚鋭敏な人なら今すでにイベリア半島北部の価値が下がりはじめたことに気がついているはずだ。果たしてこのことは活力とか、自分自身への信頼とか、特殊技能とか、生活様式とかの低下を感じたせいだろうか。それとも単にスペイン全土が北部の影響で飽和状態に達しているということなのか。こうした疑問は、おそらく両方とも一面の真実であろう。わたしには本当のところよく分からぬが、確たる経験から言えば、個人や個々の集合体の活力はそれ自体の絶対量だけではなく、それが他者のなかでどう作用するかということである。この考えに従えば、ひとつの民族の衰退は彼ら自身の欠陥や力不足のせいではなく、単に隣接する他の民族の水準が上がった結果かもしれない。そして逆にある国家の活性化とみえるものが、実は近隣の国家が衰退した結果であるといった場合もある。少なくとも現在すでに明らかなのは、経済面でのカタルーニヤ、バスク、アストゥリアスの相対的な衰えは、アンダルシアの富の増加と同時に起きているということである。しかし、これに伴ってアンダルシアの知的または精神的な復活の可能性については、まだ確たる兆候は見られないから、現状をできるだけ正確に言えば、

スペインは北にも南にも無関心の中立をたもっているようだ。しかしこの不確定な状態がこのまま続くとはいえない。まされもなくこれは過渡期の一時的現象で、やがて北部への逆戻りかアンダルシアへの情熱か、そのどちらがやがて明らかになるだろう。

アンダルシア的なるものへのこの復帰は、たとえ実現するとしても我々の親たちや祖父父母たちが抱いたようなアンダルシアのイメージとはまったく違う別のものになるはずである。我々はおそらくもう二度とカンテ・ホンダや密輸業者、アンダルシア人独特の陽気さなどに感動することはないだろう。いわば南部の特産とされるこの種のガラクタは現代の我々にとって、すべてが不愉快で興ざめである。

アンダルシアの素晴らしさ、神秘さ、奥深さなどは、住民たちが観光客の目の前で見せつけるあの派手で色とりどりの玩具とはおよそ縁のないところにある。なぜなら、これはぜひとも予備知識として必要なのだが、アンダルシア人はカステイリヤ人やバスク人とは違って他所者の前で喜んで自分自身を見世物にするから、観光客はセビーリヤのような大都会においてすら住民がこぞって、「セビーリヤ」と題したポスターに描かれている拘欄豪華なあのパレーのエキストラを演じているのではないかと、あらゆる疑念に取りつかれてしまう。演技したい、自己模倣したいというアンダルシア人のこの傾向の奥にあるのは、まさに驚嘆すべき集団的ナルシズムである。自分の模倣ができるのは自らの容姿の観客になりきれぬ人間だけだし、その能力があるのは普段から自分を眺めることに慣れていて、もっぱら自分の肉体を注視しながら自身の姿と存在に満足を感じうる人間だけである。自分の外見や存在をわざと誇張し、ある意味で自分自身を二重に強調することでアンダルシア人自身が気取り屋になってしまう。このことは、

一方でしばしば不快感を誘うのであるが、他方で己を良く知り自分の行動ぶりを正確に理解する人種であることを証明している。自己の性格とか様式についてアンダルシリア人ほど明晰な自覚をもっている人種は他にいないだろう。それゆえに、数千年におよぶその長い歴史を通じて終始一貫、太古からの不変の姿をゆつたりと保ちながら、己の運命に従い独自の文化を培うことができたのである。

アンダルシリア精神を理解するための不可欠なデータのひとつはその古さである。これを忘れるべきではない。おそらく地中海世界最古の民族であり、ギリシア人やローマ人よりも古い。蓄積された証拠から窺えるように、エジプトから歴史的影響の風が吹く以前から、概して東地中海から西地中海へといくつかの対立する風が渦巻き、大きな風となっていた。ひとつの文化の流れ、すなわちそれは我々が知りうる最古の文化であり、イベリア半島の地中海沿岸を起点として正面からリビアに流れて東方の中心部に跳ね返った。

アンダルシリア人の軽々しい、ほとんど女性的なしぐさを見るにつけ、それが数千年前からほぼ同一の響きで伝えられてきたものなのか、と考へさせられる。だからこそ、そのしなやかな優美さは数百年にわたって押し寄せた荒波や大博事による激変にも動じることがなかった。こうして見ると、セビーリヤ人のしぐさは神秘的で恐るべきしるしになり、骨の髄までぞっとさせられる。それはユーラシア大陸の反対側の地に太古から配属されたもうひとつの古い民族、すなわち中国人の謎に満ちた笑いが誘う印象に似ている。なんと奇妙な符号であろう。

アンダルシリアを主題とするエッセイのこの序文で突如中国が出てきたからといって、あまり気にしな

いでほしい。もしもあなたがアンダルシリア人なら、怒りを抑えて今しばらく私にこの対比を説明させていただきたい。比較は物事を理解するための不可欠の手段であり、あらゆる微妙な真実をしつかり掴むピンセットの役割を果たし、その微妙さの程度に応じて比較の対象どうしの距離、つまりピンセットの両腕の開きも大きくなる。アンダルシリアと中国とを同列に並べるほど大胆なこの対比の結論が、闘牛士も昔の中国の官僚も弁髪姿だったといった皮相なだけの類似に帰結することはない。官僚たちが弁髪にする習慣はもともと中国ではなく満州地方のものであり、闘牛士のそれはアンダルシリアではなくフランス起源だからである。

アンダルシリアは決して個人主義の衝動や傲慢さを見せたことがない。スペインの諸々の地域から分離して個別の国家たらしめたことではない。アンダルシリアは根っから固有の文化を保持する地域である。ここでは、我々は文化をもっと直接的なものと理解することにしよう。つまり文化とは生に対処する様々な態度の体系であり、それらは意味と一貫性と有効性をもつ。そして生とは一義的に本質的諸問題の全体であり、それらに対して人間が一組の解決策でもって応える。そうした対応の仕方が文化である。それらの解決策は多様でありうるから多くの文化が存在したし、存在しているということだ。けして実在しなかったのは絶対的文化である。すなわちどんな異論にも完璧に 대응する文化である。過去と現在とが我々に提示する文化は、多かれ少なかれ不完全なものである。その中で序列を確定できる。しかし支障や不都合や偏りから自由な文化はひとつたりともない。唯一本来の文化はひとつの理念に過ぎず、アリストテレスが呼ぶところの形而上学、すなわち唯一の学問と定義できる。それは「探求すべきもの」なのである。

不思議なことに、どんなにポシティブな文化でも一定数の重要課題を解決しうるためには、それ以前に他のすべての問題解決を放棄するか諦めるかすることが前提になるらしい。こうすることで、いわば欠点を長所に転じるわけで、多少とも成果が得られるのはその文化自体があくまで不完全なものであることをすんで受け入れたおかげである。アンダルシア文化の活力がまさに断固たる切斷手術の結果、つまり人生のヒロイックな要素をすべて捨て去った成果だったことも、これで理解できよう。そしてこれもやはり中国文化との本質的な一致点のひとつである。二つの文化は共通の根をもっている。中国の場合はほとんど形而上学的でないにせよ、それぞれが本當の根のように農地に着生しているからだ。まさしく農民文化と言えよう。

カステイリヤを旅行して見かけるのはただひとつ、畑を耕している農夫である。牛二頭のうしろで前回りになって鉄をつくる姿が、地平線上では恐ろしく巨大なものに見える。にもかかわらず、現在のカステイリヤ文化は農民のそれではない。農業あるいは農地は残って存在しているが、ここから真の文化が消え去ってしまった。もともとカステイリヤ文化は戦闘の文化だった。戦士たちは農村で暮らす、物質的にも精神的にもこの農村に生きていたのではない。彼にとつて農地は戦場にすぎず、そこから平和な農家の穀物を焼き払ったり、彼の兵士たちや戦闘用の馬のためにそれらを略奪する。丘の上に壁を立つ城にしても、農家や農場のように定住の場ではなく、たとえば鷲の巣のように次の出撃の発点であり、あるいは疲労回復のための一時的避難場にすぎない。戦士の生活に定着はありえず、絶えず動いては前進し、本質的に不安定なものである。戦士が農民を軽蔑し自分よりも下等な人間と見なすのも、まさにこの動か

ないこと、つまり「マネンテ」―「マナン」農夫という言葉はそこから来たものであるから、あるいはコルティホ（農場）やビリヤ（村落）に定着する「ビリヤノ」(村人)だからである。この二つの古語に込められた軽蔑的な響きこそは、どちらも農村で暮らしていたが性格は正反対の二つの階層、すなわち戦士と農民との文化のあいだですでに存在していた。この度合いを反映している。戦士たちがカステイリヤから去ったとき、残ったのは彼らの下で働いていた農民だけ。無定形で様式もなく、褒り栄えしない永遠の田舎者がいたるところに残った。

このような比較対照から、アンダルシア文化が農民文化、あるいは農業にもとづく文化だと私が言う場合、その語に込めたポシティブかつ創造的な意味がかなり明瞭になる。農民文化に特殊なことは、人間が農地を耕すのではなく、人間を耕すための原理やインスピレーションが農業にあるということである。

カステイリヤとは反対に、アンダルシアではいつでも戦士が軽蔑され、とりわけ「ビリヤノ」あるいは「マナン」、農場の所有者が尊敬されてきた。このことはまさに中国と同様である。数千年来、戦士はただ戦士であるがゆえに第二級の人間と見なされた。西欧では国家の至高のシンボルが皇帝の盾であったが、中国の臣民は皇帝の平和を象徴する盾の子のもとでまとめられていると感じていた。

このように戦争に対する侮蔑的感情があるからこそ、アンダルシアは世界の血生臭い歴史にはほとんどかかわったことがない。この事実はさきわめて根本的かつ持続的であったことからあまりにも明白であり、とくに取りたてて言及されることはなかった。歴史のこの方面でのアンダルシアの役割はどのようなものだったのか。中国と同じである。三百年あるいは四百年ごとに、中国はアジアの未熟な歴史段階におい

て好戦的な諸民族に侵略された。勇猛な勢力がこの「百姓」民族に襲いかかったが、ほとんど、あるいはまったく抵抗しなかった。

中国人は外部からの侵攻に対して征服されるがままであった。彼らは陣猛な攻撃には自らの柔らかさで対応する。それはコルクの戦術、すなわち譲歩することだった。しなやかな対応の見事さゆえ、狂暴な侵入者は自らの勢いを止めるべき機り所を見い出せず、勝手にコルクの中に、すなわち中国人の生活の甘美な柔らかさの中にのめり込む。その結果、二、三代が過ぎ去ると、漢州やモンゴルを根拠地とする気性の激しい武将たちは、古くして洗練された甘美なる中国人の生の様式に吸い込まれ、ついに剣を捨て厨子を掃らすのである。

アンダルシア人は地中海のあらゆる激しい力に屈し、いついかなる時も抵抗さえ試みなかった。その戦術も中国と同じで譲歩し柔軟に処すことだった。このように、いつでも侵略者の猛々しさを自らの甘美さで酔わせる。ペテイカのオリブの木は文化の規範あるいは原理であり、平和のシンボルでもある。⁽¹⁾

植物的な生の理念

アンダルシア人はよく肥えた豊かな土地で生活している。その土地は最小の努力で申し分のない果実を与えてくれる。気候も温暖だから、人は生命を支えるのにこれらの果実の僅かな部分しか必用としない。植物が大地から栄養分の一部を摂取して、残りは暑い空気、太陽と良好な光りを受けるのと同じである。もしもアンダルシア人が生命を維持すること以上の何かをやろうとすれば、つまりアンダルシアで生

活しながら、ヒロイックな事や精力的な行動を切望するならば、もっと食べ、そのために一層の努力を費やさねばならない。しかし、このようなことは彼の生存にアンダルシア的な生とは全く正反對の解決を与えることになるだろう。アンダルシア人をただ「怠け者」だと非難し、それで終わりと考えているかぎり、我々はその精神や文化の繊細なる神秘さを観察する資格はない。

織りの長い言葉であるが、すぐさま「怠惰」(オルガサネリア)を口にする。だがアンダルシア人は約四千年にわたって怠惰に耽つてきたのだ。それで不都合なことはなかった。学校の教師のように術学的態度でこれに立ち向かい、この上なく古い民族の成績表に「怠け者」と評額を下すのではなく、それを理解するために我々は目をよく開き、頭脳を研ぎ澄ますべきであろう。さもなければ、単に怠惰を称揚するという思いがけない危険を犯すことになる。なぜならば、怠惰は快い永遠のアンダルシア的な生を可能にしたからである。

アンダルシア人のこの有名な怠惰とは、厳密に言えばひとつの文化の公式である。すでに指摘したように、文化とは人生の問題を解決する方程式を発見することに他ならない。しかし人生の問題は二つの異なる方法で提起される。人生を最大の激しさをもつ生存と理解すれば、方程式は我々に最大限の努力をすることを強いる。だが我々は事前に生の問題を単純化して単に最小限の生だけを希求することだとしてしよう。そうすれば、勇敢なる民族がもっている方程式と同じくらい完璧な、最小の努力という方程式を得るであろう。これがアンダルシアに妥当する。その解決法は意義深く才知に溢れている。資産を増やすかわりに負債を減らす。生きるために努力するかわりに努力しないために生きる。努力回避が生存の原理となる

のである。

セビーリヤの人間がシティーのイギリス人のような生活を放棄するのは、イギリス人と同じくらい精を出して働くことができないからだ。このように根柢なく思いこむのは誤りである。たとえそこで働かなくてもいいような生活が魅力的な贈物として差し出されたとしても、セビーリヤ人は恐ろしくて拒否するだろう。アンダルシア人にとっても怠惰は欠点や悪弊である。しかし欠点や悪弊にもまして、怠惰は彼の生存の理念である。これはアンダルシアを理解しようと試みる誰もが省察する必要がある逆説である。すなわち、理念として、また文化の様式としての怠惰である。怠惰なる言葉をその同義語の「最小の努力」と置き換えても、その思想は変わらないし、逆により評価すべきひとつの側面を得る。

歴史上のいかなる時代にもまして、我々は最大の努力を人生の理想とする時代に生きている。それゆえ我々とはあまりにも対極にある生の営みを理解することは難しい。無論、怠惰とは単なる否定、純粹に何もしないことだ。しかし我々はアンダルシア人の怠惰を誇張してはならない。最後にはアンダルシア人は必要であれば何でもするだろう。なぜならばアンダルシア人は存在し、その怠惰は労働を完全に排除するものではないからである。むしろ問題は労働に対する感情や態度であろう。怠惰にインスピレーションを受け、怠惰を志向する労働である。したがって、労働はまるで自らを粘るかのようになり、あらゆる面で最小のものとなる。このような面は、怠惰を理想とする農村において人々が働くときに往々にして見える不遜な、ひけらかすような過剰な態度を想起すれば、鮮明に浮かび上がる。

結局、フレデリック・フォーン・シュレーゲルが述べたように、怠惰とは我々に残された「楽園」の最後

の残滓なのだろう。そしてアンダルシア人は、西欧のなかで生の楽園という理想に忠実であり続けるただ一つの民族である。もしもアンダルシア人が生を営む風景がそのような生存の様式を提供しなければ、そうした忠実はいえないただろう。しかし文化を環境の機械的な反映と見なすような凡庸な説明に陥ってはいけない。

北部から訪れる人間にとって、アンダルシアの平野の輝々たる光りと色鮮やかな恵みは凄まじい興奮を誘い、それが熱狂的な生へ駆り立てる。このためアンダルシアの生存は、無気力でそれが萎えることがない限り、情熱的なものと思われる。この民族には偉大な活力が秘められていてと想像し、夜の通りでセビーリヤの女たちを見ると、彼女たちの中に素晴らしい情熱や神々しいほどの情念を嗅ぎ取るのだ。しかしなんとという大間違いだろう。北からやってきた人間は、アンダルシア人が彼の「環境」の利点を、反対の意味で利用していることに気づかない。アンダルシア人は最小の活力だけをもっている。その活力は澄みきった空気と肥沃な大地からいとも容易に得られる。アンダルシア人は環境に対して最小限に反応するだけである。なぜなら、彼はそれ以上のものを望まないし、植物のように大気に浸って生きているからである。

楽園生活とは何よりも植物的な生である。楽園は植物、菜園、庭園を意味する。そして植物の存在は、それが周囲の環境に反応しないことで動物とは異なる。植物は環境に受身的である。それは地球の養分を根から吸収し、葉から太陽と風の養分を受ける。それ以外に何もしない。植物にとって生きることとは、外から養分を受け取ると同時にそれに喜びを感じることである。太陽は養分であり、同時に緑の小さな手の

ような業を愛撫する。動物にあつては、養分の摂取と喜びとはより分離している。動物は食べ物を得るために努力しなければならない。その後で養分摂取の機能を用いて、自らの喜びを探さねばならない。我々が北部に行くにしたがつて、そのような生活の二つの側面がより分離していることがわかる。つまりこうである。アンダルシシア人にはイギリス人やドイツ人の働き方と楽しみ方、いずれもが不条理に思える。どちらとも節度を欠いて分解している。アンダルシシア人にすれば、あまり働かないこと、そしてほどほどに楽しむことが好ましい。だが二つのことを同時にやっつてのける。二つの行為は、途切れることなく不意打ちもなく、あたかも完全なアダージキ・カンタービレのように、柔らかに湧き出る生の身振のなかで行われる。アンダルシシアの生活のなかでは、祝祭日や日曜日は週の他の日々に溶けこみ、平日は祭りや黄金の休息で満たされている。しかしまた逆に、祝祭日は乱痴気騒ぎでもなければ特別なことでもない。日曜日は北部の人種の場合よりも月曜日のようであり、水曜日のものである。セビーリヤだけが北部からの旅行者のために乱痴気騒ぎとなる。地元住民にとつて日曜日はいつも祝日らしきはない。

我々はアンダルシシアを凝視すれば目が眩み、興奮の場面が見えてくるものと信じてしまう。だがその表面的な印象が消えるまでしばらく待てば、我々は発見するであろう。アンダルシシア的な生とは、どんな興奮も排除し、悲しみや喜びを細やかな注意で抑制する性格をもっているのだと。

何よりも強調される大事なのは、まさしく生の恒調。それはアルトもなければバスもなく、完璧な連続性のなかで生に貫かれる最小でエレメンタルな悦楽のレバトリである。楽園にはその瞬間のうちに熱狂的に興奮し、その後には空ろな、あるいは苦しみの時間が訪れるといった起伏の激しい悦楽は含まれない。

楽園の植物は最小限で、だが途切れることなく生を楽しむ。自らの業を太陽の暖かい日差しに浴びせ、支枝を微風に揺らし、芯をにわか雨で活き返らせて楽しむ。こんなわけで北方の人間には嘘のように思えようが、いまだにこの地球上の片隅に、実際に人生の基本的悦びが楽しい天候を享受することと思っている人間が数百万人いるのである。アンダルシシア人がその気候から、空から、青い朝から、黄金色の賞牌からどれほどの悦楽を取り出しているのか分らない。彼らの喜びは内面的でも精神的なものでも、歴史的な前提にもとづくものでもない。このために、彼は時代の風圧を最小限しか受け入れなかった。しかしその生存の根は、エレメンタルな、確実な、伝統的で宇宙的な喜びの中に着生し続けている。アンダルシシア人は生存の植物的感覚をもち、好んで自らの皮膚に生きている。善悪は何よりも皮膚的な価値にかかわる。柔らかいものは良きことであり、悪しきことは激しく、とげとげしいものである。彼の本当の永遠の祝日は大気のなかにあり、大気がその生存を貫き、光りと情熱の権威を彼あらゆる行動に添えている。それは結局彼の行為のモデルである。アンダルシシア人は自らの文化が彼を包む大気のようになることを希求する。

この民族は他のいかなる民族にもまして、異なつた形でもしかもより本質的に土地にかかわり土地に配属されて生きている。彼にとつてアンダルシシア的なものは、何よりもアンダルシシアの田園と空気である。アンダルシシア人種、つまりアンダルシシア人と同じことだが、それはあとについてくる。彼は自分を副次的な要素、地上の楽園の単なる利用者と感じている。この意味で人間に特殊な資質は関係ない。自分を特徴的な民族と信じている。すべてのアンダルシシア人は、アンダルシシア人であることが法外なる

幸運であり、そのことで恵まれてきたという素晴らしい考えをもっているのだ。神によって楽園の地が約束されたヘブライ人が多くの民族のなかでも自らを別格と信じるように、アンダルシア人は自分自身が特典を授けられたことを知っている。なぜならば、神は事前に約束はしないが、彼らに地球上で最高の土地を与えたからである。約束の地の人間に対して、アンダルシア人は贈られた土地の住民、「楽園」が返還されたアダムの子らである。

このアンダルシアの初原のルーツは強調すべきだろう。それは地球上のひとかけらの土地への特別な情熱である。アンダルシア文化は農民文化であるという私の診断に込めたポシティブな意味が明確な特徴のなかに表われるであろう。人間と土地との結びつきはこの地においては単純な事実ではなく、精神的な関係の域にまで高められ、理想化され、ひとつの神話となる。ここではアンダルシア人は、他の民族と同じく物質的に土地に生きていたのだが、彼らだけは思想あるいは理念のなかで土地に生きていた。ガリシア人は生まれ故郷から遠く離れて土地への郷愁を感じている。アストゥリアス人やバスケ人は、もともと住んでいた狭くて湿った盆地から遠く離れてしまうと、悲嘆のうちに生きる。彼らの母なる大地との結びつきは物質的に盲目的であって、精神の意味を欠いている。それに比して、アンダルシア人には故郷を去ってもそうした感情が自動的に湧き出ることはない。アンダルシアで生きるとは理想であり、意識された理念である。言い換えると、ガリシア人はガリシアの外でもガリシア人であり続けるが、移住したアンダルシア人はもはやアンダルシア人ではありえない。アンダルシア人の特性は蒸発して立ち消える。アンダルシア人であることはアンダルシアの土地と共生すること、その字面的な優雅さに応

え大気の靈感に従うことだからである。

この理想、すなわち理念としてのアンダルシアの大地は、私のような北部育ちの人間にはあまりにも単純かつ原始的、植物的で貧しいもののように見える。それはそれで仕方のないことである。しかしそれはあまりにもエレメンタルかつ本質的で、ほかの何よりも前から存在するので、それ以後の人生すべてがやはり地元で展開する場合には、生まれながらにして聖別され完璧なまでに理想化されている。したがって、アンダルシア人の生存形態のすべて、とりわけごく瑣末な日常的な動作や行為で、他の民族にあってはただ見苦しくて靈性のかけらもないようなことが、理想なるものあの神聖な雰囲気によってひとつの様式にまで高められ、優雅さで縁取りされる。他の民族で立派なのは上部構造であるのに対して、アンダルシア人の素晴らしさは下部構造、つまり普段からいつも為したり言ったりしている無作為のごく瑣末な言動にある。

しかしその逆も真実である。生存の植物的土台においては他のどの民族よりも理想的であるこの民族は、それ以外の面では理念のひとかけらももっていない。日常的なこと以外の次元において、アンダルシア人は、私がかかるかぎりもつとも非理想的な人間なのである。

原註

(1) 「聖ルイの十万人の息子たち」(ウィーン体制のもとで一八二〇年のスペイン自由主義革命への列強の干渉に際してフランスが同年四月に派遣した軍艦)がシエラ・モレーナの時に迫り着き、すぐさまアンダルシアの平野を発見すると、そこに広がる風景に同じような強烈な印象を受け、大連隊は素晴らしい土地を前にして武器を放置してしまった。このようにシャトーブリアンは語った。

(2) このことは十分に理解していただきたい。ひたすら無みな生活に浸っていると思っているとアンダルシア人を批判するのは愚かなことだ。私の考えはこうである。その文化、したがって彼らの「精神的な」活動は、生存の植物的側面を称揚し洗練している。それゆえ他の多くの種部はさておき、植物、実りをもたらすもの、無用なものにも、また葡萄や花にもアンダルシア人は優しい情愛を抱く。アンダルシア人はオリブ畑を耕すが、植木鉢もつくる。食生活については、例えば農場の作別はほとんど食べないし、粗末なガスバーチョの食事が与えられるだけである。このことは程度となく世論が同情を寄せたことから十分に知られている。悲惨な現実には確かである。しかしその観察は不完全であるがゆえに誤りを含んでいる。アンダルシア人では貧乏人だけではなく誰もが少食で、しかも食事は質しい。これがより真実に近い。アンダルシアの食事はイベリア半島で最も粗末で原始的であり、最も乏しい。たとえばアスベイトの日雇い農民は、コルドバやハエンの成金よりもふんだんに豊かな食事をとっている。アンダルシア人はここまでは植物に似ている。食べないで栄養を探り、大地と空に漂って生きる。中国人と同様である。

訳註

(1) カノパスはイギリスの議会制を模範にした王政復古体制の立役者である。しかしシルベラに関しては、著者オルテガの思い違いであろうが、彼はマラガ出身ではなく、マドリー生まれである。シルベラはカノパス後の保守党リーダーとなり、一八九八年の「惨劇」に陥没されて再生運動が起こった当時、スペイン國家を「瀕死の病人」に喩えてよからの改革を提唱した。慈善事業改革にも関心を向け、社会改革協会の創設にかかわった。因みに、一九世紀を通じてアンダルシア出身の総理大臣や閣僚経験者を挙げれば、相当長いリストになろう。これについては文献表の *Acosta Sanchez* (1975) を参照されたい。

(2) オルテガがこのエッセイを書いた一九二七年当時、アンダルシア経済の停滞は明らかであった。この事実は最近年の経済史研究によって証明されることである。ただし、オルテガの観察を并置するとすれば、セビリーヤで一九二九年開演予定のイベロ・アメリカ博覧会が国家的行事とされ、当時セビリーヤの地域経済は一時的過況を呈したことがある。

(3) イベリア半島南部に前六世紀から前六世紀にかけて栄えた古代王国、タルテソスのこと。

(4) この文脈における「百姓」はスペイン語で *campesinos* が用いられている。日本史では百姓は農民だけを意味するものではないが、中国で農民を指す「百姓」という漢語が語源的にヨーロッパに紹介されたとき、「百の姓」がそのまま直訳されたい。詳しい経緯は我々には分からない。

(5) ベタイカはローマ帝国支配下のイスパニアの一州、今日の西アンダルシア一帯の古称。

訳者あとがき

オルテガ・イ・ガセー（二八八三—一九五六年）の『アンダルシア論』(Foro de Andalucía)は全面紙「エル・ソル」に一九二七年に掲載されたエッセイである。この作品は後にオルテガ自身が主幹する『西洋評論』社が出版した『旅と風景』（マドリッド、一九五九年）に掲載された。さらに同エッセイは最近では『アンダルシア文化叢書』出版事業の一環として、その高弟の一人マリーア・サンブラーノの作品集『アンダルシアの夢と現実』（末尾の文庫表）の最後の一章に採録された。訳出に当たり我々が用いたのは、ここに収められたものである。原文のなかのイタリックで綴られた語彙は「」で示し、特殊な語彙や補足が必要と思われる場合には（ ）で訳語、説明を加え、また訳注を設けた。

*

ところで、オルテガはわが国でもかなり早い時期から『大衆の反逆』の著者として知られ、全集の邦訳もあり、文明評論家・哲学者オルテガの解説はここではしない。ただ以下では『アンダルシア論』をめぐって若干の説明を付しておきたい。このオルテガの作品は、近代史家ホベールがかつて指摘したように、一九世紀後半スペイン自然主義の展開の延長線上に位置づけられる。スペイン自然主義が手にした観察技法と美学は、当時の社会や王政復古体制の指導者に対する批判と同時に「地方の発見」という双方向をたどった。この後者の流れの中で、人間が生まれ育った土地に対する新しい態度が出てくる。とくに文学・美術に濃厚に見られるこうした態度は、一九世紀末から二〇世紀初頭の歴史的脈絡と深く結びついていた。すなわち、一方で運れてきたロマン主義の遺産として異なるものや特殊なものへの熱い眼差しや風景に対す

る鋭い感性が大切にされ、他方でヨーロッパ思想精神に生の哲学が横溢していた。こうした人間と風景の結びつきを文学的エッセイに結晶化させたのがオルテガの作品である。

オルテガも述べるように、アンダルシアには一九世紀初頭以来、外部あるいは他者から観察されて創られたロマン主義的イメージが付きまとった。これを鏡として内部からアンダルシアの社会的現実への観察がなされる。十九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、この地域がかかえる深刻な社会問題——大土地所有制のもとでの数多の日雇い農民の悲惨が世論の同情を集め、土地・農民問題は国家的問題となっていた。公権力の側からも「南部問題」が語られ、九八年の世代の一人、作家のアソリン（本名はマルティネス・ルイス）はセビーリヤ県下の農村レプリーハなどを視察に訪れ「悲劇のアンダルシア」を著した。当のアンダルシアにおいても、一〇年代、土地・農民問題を地域固有の問題として受けとめたブラス・インファンテらの地域主義者たちは、マラガ県ロンタでの地域主義者大会（一九一八年）の開催に向けての招集アピールで次のように訴えている。「アンダルシアが空腹と無知の国で、世界でもっとも悲しい人々のもっとも陽気な土地であり続けてはならない」。外部から創られたイメージの抵抗が試みられたが、アンダルシアのイメージが大きくは変わることはなかった。太鼓のアンダルシアからラティファンデオのアンダルシアへ、闘牛とフラメンコのアンダルシアから革命的農民のアンダルシアへ、山賊伝説からアナキスト伝説へ。輸出されたもう一つのアンダルシアである。

豊かすぎるロマン主義的なアンダルシアのイメージは、スペインのイメージと重なりなりつつ立ち消えることはない。オルテガの小さな作品は、彼自身の意図を超えて、皮肉にもアンダルシアに関するト

ピックを拡大再生産することになるからである。例えば、フランスの地理学者のL.ゴッティは、オルテガの作品を踏まえて以下のように述べている。スペインは地理的にも文化的にも多様性に富んでいるが、アンダルシアこそは数千年来、文明化されたスペインであり、これを集約している。アンダルシアはスペインの他のどんな地域よりもスペイン全体の相貌を想起させ、スペインにおいて「他とは異なる事実」はカタルーニャではなくアンダルシアにあると言えよう。そして「アンダルシア、スペインの本質」といったトピックが、フランコ体制の時期に繰り返される。人類学者インドロ・モレーノは、オルテガの作品に見られる本質論的議論を批判し、アンダルシアが被ってきた文化的疎外を指摘する。モレーノによれば、「神聖なる祖国の「一体性」を公式のドグマとするフランコ体制の時期、スペインのイメージに深く浸透していたアンダルシアのなるもの、すなわちその民俗的要素は固有の社会的文化的脈絡から切り離されて操作された結果、「スペイン文化」のショーウィンドーに陳列され、スペインのイメージを創造するために利用されたのである。こうしてアンダルシアのなるものとスペインのなるものとの等値が主張された。そこには多民族・多言語のスペインを公式に否定するといった意図が見てとれよう。

オルテガ―その後継者も含め―のアンダルシア論の解釈のなかで、植物的な生あるいは生存の理念としての怠惰を疎外的な性格として鋭く批判されるが、農村社会学者セビリヤ・グスマンは、怠惰すなわちこの場合、労働に対するアンダルシア人の受け身の態度に注目し、それをポシティブに捉える。生産力主義が一つの原理でなくなり、労働による人間の価値付けがなされる資本主義的イデオロギーが疑問に付される今日、「無為なる生活」の理念にアンダルシア日雇い農民が歴史的に維持・発展させてきた倫理

を見る。もちろん、労働のプロテスタント的倫理や企業家的精神の欠如ではなく、農村アナキズムとして特徴づけられる内容に通じる倫理で、結局、それは自然を享受したり共有すべきものとして評価する農民的な経済倫理とされる。農業に資本主義が浸透し、自然―耕地や森林―が搾取・開発の対象となりつつあった一九世紀末、農民文化が生ずるアンダルシアにおいて、日雇い農民が日々の生活で追い求めたのは、有機的農業に基づく自立的な家族経済の維持だったのである。日雇い農民の抗議の対象は、過剰な資本・土地、すなわち賃金労働による大土地経営であり、放棄された土地である。

オルテガのアンダルシア論は、以上に見たように、二つのレベルの省察を我々に提起しているように思われる。ひとつは解られたアンダルシアのイメージの検証とスペインのイメージとの関係性をいかに説明するか。スペインが経済発展を遂げ、七〇年代後半の民主化を経て普通の国となった今日、歴史学研究においてもスペインは大きく様変わりしてきた。アンダルシアと同様に、他者の視線に染んだスペイン現代史像の問いなおしが必要とされよう。また地方で、アンダルシアの社会史・農民運動研究に携わる訳者の一人にとって、農民文化はいつまで語れるのか、農民的な労働観あるいはその変容はいつ起きたのか。「アンダルシア論」はこうした問いかけも迫るのである。(岡住正秀)

*

アンダルシア論に関する基本的文献

Acosta Sanchez, J. [1979] *Historia y cultura del pueblo andaluz*, Barcelona, Cuadernos Anagramas.

- Azoria [1973] *Los Pueblos La andaluza tréfica y otros orizontes (1900-1905)*, Madrid, Editorial Castilla.
- Bernal Rodríguez, M. [1981] "La Andalucía conocida por los españoles", Bernal, A. (dir.), *Historia de Andalucía*, t. 8, Barcelona, Cupusa Planeta, pp. 217-231.
- Bias Iazante [1976] *El idari andaluz*, Madrid, Tucar Ediciones.
- Cazorla Perez, J. [1990] *Sobre los andaluces*, Málaga, Editorial Librería Agora.
- Comín, A. C. [1985] *Historia de Andalucía*, Sevilla, Editoriales Andaluzas Unidas.
- Dominguez Ortiz, A. [1983] *Andalucía ayer y hoy*, Barcelona, Ed. Planeta.
- Gómez García, F. [1991] *Religión popular y Mesianismo Analfabetas de la cultura andaluza*, Granada, Univ. de Granada.
- Hurtado Sanchez, J. y Fernández de Paz, E. (eds.) [1999] *Cultura Andaluza*, Sevilla, Univ. de Sevilla.
- Julian Marías [1990] *Nuestra Andalucía*, Sevilla, Editorial J. R. Castillejo.
- Moreno, Isidoro [1993] *Andalucía: Identidad y Cultura*, Málaga, Editorial Librería Agora.
- Id. [1981] "Primer descubrimiento consciente de la identidad andaluza (1868-1890)", Bernal, A. (dir.), *Historia de Andalucía*, t. VIII, Barcelona, Cupusa Planeta.
- Id. [1981] "La nueva búsqueda de la identidad (1910-1936)", Bernal, A., op. cit., pp. 253-273.
- Id. [1981] "Hacia la generalización de la conciencia de identidad (1936-1981)", Bernal, A., op. cit., pp. 275-298.
- Ortega Muñoz, J. F. [1992] *Apartir para una teoría de Andalucía*, Málaga, Editorial Agora.

- Serret, J. [1975] *Andalucía como hecho diferencial*, Granada, Univ. de Granada.
- Zambrano, M. y Ortega y Gasset [1994] *Andalucía Suerte y Realidad*, Granada, Talleres de Ediciones Arel.
- Zoide Narango [1998] *Ne Oriente ni Occidente. Viaje al centro de la cultura andaluza*, Sevilla, Ediciones de Andalucía.
- Varuss [1980] *Los Andaluces*, Madrid, Ediciones Istmo.
- ジェラルド・ブレナン (岡住正秀・渡辺太郎訳) [一九九二] 『グラナダの南へスペイン農村の民俗誌』、現代企画室。
- 辻 光博 [一九七八] 『アンダルツィア物語』、書誌季節社。
- 同 [一九八三] 『続アンダルツィア物語』、書誌季節社。
- 中塚次郎 [一九九九] 『地中海的規範とアンダルシアの農民運動』 『社会的結合と民衆運動』 (地中海世界史5)、青木書店。
- 水川怜二 [一九九九] 『アンダルシア風土記』、岩波書店。

*追記

訳者の一人、水川玲二氏は、一九九八年四月から一九九九年三月までの一年間、北九州市立大学外国語学部の客員教員として招かれました。長年住みなれたアンダルシアのセビーリャに帰ることかなわず、帰西を前に一九九九年五月に他界されました。謹んでご冥福をお祈りします。